

## 『源氏大鏡』三類本本文と校異(二) 帚木一夕顔

田坂, 憲二  
福岡女子大学教授

<https://doi.org/10.15017/10464>

---

出版情報 : 文献探究. 16, pp.53-64, 1985-09-25. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :



# 『源氏大鏡』三類本本文と校異

(二)

帝木一々類

田坂憲二

本誌前号に引き続き、『源氏大鏡』三類本を九大本を底本として翻刻し、他本との主要な校異を掲げる。

翻刻に際しては原形を尊重したが、以下の如き処置をとった。

- 一、漢字・仮名は通行のものに改め、全体に読点(こ)を施した。
  - 二、ミセケテ記号は(ヒ)に統一した。
  - 三、濁点、合点の付し方には一貫性がないたため削除した。
  - 四、丁替りは「(一)」の形で示した。
- 校合に用いた字本とその略号は以下の通りである。

- ㊦ 東北大学狩野文庫本『源氏無外題』
  - ㊧ 天理図書館本『源氏無外題』
  - ㊨ 天理図書館本『無妙抄』
  - ㊩ 天理図書館本『源氏大鏡』
  - ㊪ 島原松平文庫本『無外題源氏抄』
- 底本との異同のうち、以下のものはこれを記さなかった。但し、異文の派生、本文の系統を考へる上で重要なものはこの限りでない。
- 一、表記・仮名遣・音便・ミセケテ等の相違。
  - 二、三類本本来のものでないと思しき書き入れの類。
  - 三、互に準ずるものとして、北方・北の方、返し・返事、こくねちーこくわつ、の類も校異としては示さなかった。
- 底本及び校合本については、前号拙稿を参照されたい。

## 二、帝木

源氏此巻に中将ときこり、御まゝ母に藤つほのか、やく日の宮と申は、先帝の女①四の宮にておはします、桐つほの巻に御門へ参給へり、源氏とおなじやうに時めきたまへは、世人か、やく日の宮と申すなり、その、かたちをのみ源氏御心にしめておほしめして、大殿のそひふしの君をば御心にもとめ給はず、しのふ、みたれやとある、引哥、春日野のわかむらさきのすり夜忍ふのみたれ限りしられず、

此巻に品さためといふ事あり、つれ／＼とふりくらしたるよひの雨に、殿上にもおさ／＼人すくな也、おおく殿敷者等の「(一)」源氏はなか／＼御物いみにうちにさふらひ給ふ、その御殿を所もれいよりはしつか也、御そひふしの姫君のめに頭の中持とて、これも世にすきかましきあた人也、此中持と左のむまのかみと藤式部丞と三人まいて、世中の女のよきあしきふるまひを、かみなか下も三品にわかちてさためめらすひしを、雨夜の品定とはいふ也、馬のかみは世のすき物なるを、中持待とりてさためいふに、き、にくき事おほかり、もとのしなはたかく生れながら、今くらみしかく世をとうへぬれば、かみかかみとはいふへからず、中のしなとことほるへし、など

- (1)㊦ナシ (2)㊧ナシ (3)㊨とそ (4)諸本、けり (5)諸本、御
- (6)㊩ナシ (7)諸本、の (8)㊪殿上人 (9)㊦し
- (10)㊦にて (11)㊩世間 (12)㊨あそひ (13)㊦と申、 (14)㊦ナシ
- (15)㊩ナシ

さま／＼ひいて、大かた人はかたちは「（87）まほならずとも、心  
 のおきたにのちやかにたまりたらはとなり、又たとへたる物三あ  
 り、木のみちのたくみの、よろづの物を心にまかせてつくりいたす  
 も、たゞりんしのもてあそび物をめつらしくし出したらんをば、上  
 すとは（88）いふからず、さたまりたるほうの有物を難なくつくり出す  
 を、上すとすへし、又給所にも、目にもめほうらいの山、から国の  
 はけしきけた物、あら海のいかる魚のすかた、まにのかほなとは  
 いきほひをかきたれとも、まことをみねはよしあしもさたかならず、  
 たゞ（89）こもとの山のけしき木ふかくたゞみなし、時につけ（90）「（91）  
 たるまかきのうちを、けにと思ふよにかきなしたるを、上すとも  
 ちゆへし、又手をかくにも、てんなめにはしりかき、上すめきて書  
 たるはかとくしけれとも、二たひ取ならへて見る時、まことの文  
 字をかきしつめたる手は、こよなく見まさりする物也、かやうのこ  
 とたにかくこそまことをたつね待れ、まして人の心のうはへばかり  
 つくろひたらんは、いとたのもしけなしや、そのはしめの事、われ  
 らのみし女（92）のよしあしのふるまひを申出て、標氏にまかせ申たり、  
 此始終のものかたり、三人して四つたり、馬のかみ、はようみし女  
 何事もすくれててうしいたし、（93）又かたちわろくて人に見えは  
 馬のかみ（94）・おもてふせにやならんと、みさほにもてつけて、見なる  
 さま、にかたぢもわろくはあらず、たちぬふ事上手にてたなはたの

- (16) ⑧ナシ (17) ④ナシ (18) ⑤見 (19) ⑩諸本、見えぬ (20) ④ナシ
- シ (21) ④ナシ (22) ⑥ふかきたくみ (23) ⑧ナシ (24) ⑧ナシ
- (25) ④時たしかに (26) ④時に、④時は (27) ⑧ナシ (28) ⑧ナシ
- (29) ⑧ナシ (30) ⑩諸本、とも (31) ⑧ナシ (32) ⑩⑧⑨⑩ナリ
- (33) ⑧に (34) ⑧にし (35) ⑧わかかく (36) ⑩諸本、か (37) ⑧つく

手にもぎとるまじう、又ものをせめいづる色のうつくしき事、龍田  
 姫の山のにしきにたくへたり、かやうにはありながら、物ねたみを  
 いたうして、ゆるしなくうたかひ侍りしもうるさくて、こらさんと  
 思ひてとかくなさけなき事をいふに、女もおおめぬすちに、馬の  
 かみかおよびひとつをひきよせてくひたり、かゝるかたわさへつき  
 ぬとかこちて、おゆひをかゝめてまかり出ると、馬のかみ、手を  
 おりてあひみし（100）「（101） ときかそふればこれひとつやは君かうき  
 ふし、女、うきふしを心ひとつにかそへきてこや君か手をわかまへ  
 きあり、そのち馬のかみひさしくまからず、いといたくつなひき  
 てみせしまに、引哥、ひきよせはたゞにはもちて春駒のつなひきす  
 るそなはたつときく、馬のかみ、りんしの祭の調業に夜ふけてみせ  
 れる夜、なま入わるくつめくはるれと、雪とうちはらひて行たり、  
 ふせんにたき物して、あつこえたるきぬうちかけて、今夜ばかりや  
 と待けるけしきなり、されはよと心おこりするに、さうし身はなし、  
 身（102）とて、女はうともはかりぬて、しやうしみは（103）「（104） おやの  
 かたへおはしたるとて、ひたやこもりなりしかは、引哥、うきによ  
 りひたやこもりとおもへともあふみの海はうち出てみよ、（105）  
 おひなくたかくて、そのうちとかくしてあひみさりし程に、此女こそ  
 はかとなくなやみてはかなくなりぬ、いとたはむれにく、おほえ侍  
 りしとて、あはれとおもひし出たるけしきせ、引哥、ありぬやと心

- (38) ⑧ナシ (39) ⑧も (40) ⑧いみしう (41) ⑧そ (42) ⑧も
- (43) ⑧手找わるへき (44) ⑧なり ④ナシ (45) ⑧なり、 (46) ⑧まうて
- (47) ⑧ま、 (48) ⑧くわれ (49) ⑧けり (50) ⑧ふせこ、 (51) ⑧
- ⑧ナシ (52) ⑩諸本、こもり (53) ⑧とく

みかてらあひみねはたはぶれにくきまでぞ恋しき、おなしく馬のみ、のちにみし女はかたらは立まさり、手つき口つきみなたしくしからず、いとよもなく心とまり侍しか、すこしまはゆき所ありて目につかぬ心すれば、かれくくに「いよ、見せ侍りしほとに、又心をかはしたまふそ有けり、神無月のころほひ月のおもしろきに、ある殿上人とひとつくるまにのりて内よりまかりいづるに、此上人いふやう、こよひ人やまつらんやとこころくろしきといひて、此女の家にはたよきぬみちなりければ、あれたるくつれより池の水かけみえて、月にすめる住家をすきん事さすかにてあり侍ぬ、今の殿上人も、馬のかみ・もとよりかよふ所ともしらす、又馬のかみも、此上人心をかはしたるともしらす也にけり、今の殿上人、ふどころなりけるいえをとり出てふきすまし、かけもよしなとつしりうたふと云事也、かけもよしとはさいはらに、あすかひに「いづくやとりはすへし、かけもよし、みもひもさむし、みまぐさもよし、駒のはなは、このやとにきくおもしろくうつろひて、風にきほひたるもみちのみたれなと、けにあはれとみえたり、あはれは風、女うちより琴をかきならしたり、殿上人いたくめて、庭のちみちこそふみわけたる跡もなれといふ、引哥、秋はきぬもみちは庭にふりしきぬ道ふみ分てとふ人もなし、菊を折てすのもとにあゆみよりて、殿上人、琴の音・きくもえならぬ宿なからつれなき人をひきよとめ

- (53) は (54) 今夜 (55) ナシ (56) 此 (57) 侍 (58) 殿 (59) 侍らすなり (60) ナシ (61) ナシ (62) ナシ (63) ナシ (64) ナシ (65) ナシ (66) ナシ (67) ナシ (68) ナシ (69) 諸本、も

けり、こゑいたうつくろひて女、木枯に吹あはすめる笛の音を引とむへきことの葉もなし、となまめきかはすをみてにくくなりて、そのうちはその「12才」女のもとへまからすなりにけり、此ふたつのことを思給ひあはすまに、今の女のふまみそいみしくたのもしけなき、源氏などの御心には、おらはおちめへき教の露、ひろは、きえなんとする玉さ、のうへの敷などのやうに、あへかにやさしき女はかりをこそおもしらくおほしめす「けれど、あまりすきたはめらん女には御心をかせ給へ、あやまりて見ん人のかたくななる名をもたて「へき物也」と源氏をいましめ申たり、源氏もかたへみて、さること、はおほす「し、頭の中持はましていみしくしむして、つらつえをつきてむかひたふさま、のりのしの世のことはりとき、か「12才」せん所の心ちすれとも、かゝるつるてにはをのくむつこともえしのひと、めり、とまへにあり、頭中持、なにかしはしれ物のものかたりをせんとて、忍びてみそめたりし女の、さても有ぬへきさまにみえしかは、とかくになれゆくほとに、おさなきものなとも侍りし、此女のあるやうかたちもたをくともよしあり、心ものとやかに心うつくしきはかりにて、つらきことあれとも、みしりけぬとおもはれん事をばらて、色にもいたさす、涙をこほしても、はつかしき事に忍びかくしたるけしきあり、心やすくて、忘れすなからたとえとくことおほかり、中持のほん「13才」北の才は、右大臣

- (69) 諸本、そなし (70) ナシ (71) 女の女の (72) は (73) なかみ (74) おしみ (75) おは (76) ぬ (77) ナシ (78) ナシ (79) 手く (80) つく (81) ナシ (82) ナシ (83) ナシ (84) ナシ (85) ナシ (86) ナシ (87) ナシ (88) ナシ (89) 諸本、な

の四位の君にてよせをもき入なれば、そのかたより、なまけなくう  
 たてある事なき、まゝたよりにいひておとしたり、中持は「さやうはう  
 キニとあらんともしらす」とたえかちにて還行に、むけにおもひい  
 はれて、なてしこの花を折てをよせて、山かつかきほあるとも折  
 くにあはればかけよ撫子の露、此返しをばせすして、やめて此女  
 のもとへ行たりけり、れいのうちもなき物から、むけは「さやうは  
 つよりも物おもひたるけしきにみえて、虫のねにきはへるありま  
 むかしものかたりめきて侍し、あつちのなまけなまけ 競と書てあらまふ同  
 し心也、あれ「はう」たる宿の露けきをなひめたり、中持、や  
 まとなてしこをよせしきて、ちりをたになと、まつおやのこころ  
 をとる、引手、塵をたにすへしと思ふ、咲しよりいもと我ぬる、夏  
 の花、中持、咲まゝの花はいつれとわかねとも猶とこ夏のしくもの  
 せなき、女、うちはらふ袖もつゆけ床夏に懐ふきそふ秋もきにけ  
 り、風吹くしに人とかたはらふ まめくしくうらむる事もなかり  
 し程に、心やすくおもひて又と「た」をきけるまに、かの本台よりお  
 とされしことにおされて、あとかたもななくこそかきけちて「はあ  
 うせ侍りにしか、これは心よはき女にて、いふへきことをもしらす  
 かほにやさしき事にて、中持の心さしをもいたつらになし、又其身  
 もいたつらになりし、されはたよき女は、わたむへからん事をとも  
 にくからすかすめなし、えんすへきふしもみしれるさまにほのめか

- (91) 松ナシ (92) 松ナシ (93) あり (94) 松は (95) 松ナシ
- (96) 諸本、ナシ (97) 松ナシ (98) 松まほへる (99) 因妻、の
- く (100) のきて (101) 松ナシ (102) 思ひ
- (103) おそろしく (104) 諸本、て (105) たえ (106) まま
- (107) て (108) し (109) なし (110) ナシ (111) 侍は

すへし、それにつきて心さしも増れり、又おとこの心もみま女から  
 におさまりもへし、えんすま あまりうち見はなちたるは、  
 心やすくうらたまさまにはみゆれとも、たのみ所なし、つなかぬ舟  
 のうきたるためしむけにあやなし、さは侍らぬ「はう」か、と馬の  
 かみ申せば、頭の中持うなつく、身をくわんすればきしのひたいに  
 ねをばなれたる草、いのちをろんすれば江のほとりにつなかぬ舟、  
 と云本文の心なり、やさしくはあれども、心よはくて身をかうくな  
 したるゆへ、これは下のしなの人と云り、さて藤式部の家かもとに  
 こそけしきある物かたりはあらめ、とせめ給へは、いまたもんしや  
 うのしやうに侍し時、かれしき女のためしをなん見侍りし、馬のか  
 みの申論しことく、しやうそくなとのことにふれて、おほやけわた  
 くし、心えて、たよりあるかたはいみしく侍し、又本文の「はあ  
 かたも、なま／＼のはかせなとほくちあくましくかしく侍りしほ  
 と」なつかしきさいしの思ひはなく、むさいのおとこははつかし  
 くなん侍し、わつかなるこしをれふみつくる事も、その人を師とな  
 してなんならひ侍りしかは、いまにそのおんはわすれ侍らす、有時  
 物こしにあひ侍て、こゑもたかやかにていふやう、月ころふひやう  
 おもきにたへかねて、こくねちのさうやくをふくして、いとくさま  
 により、えたいめん申す、まのあたりならずとも、さるへからん  
 さうしはうけ給はらん、と云に、返ことなにかいはれん、たさう

- (112) 諸本、す (113) 松えむ (114) ナシ (115) とま (116) 諸本、
- と (117) ゆへに (118) ナシ (119) の (120) 文字 (121)
- ほと、 (122) をも (123) 女 (124) 声 (125) ナシ (126)
- ナシ (127) いはん





並 空蟬

空蟬のかく人にはかはりてつれなきも、ねたうも心つきなくもおほしめす。二君に、今一度たはかれとかたらひ給ふ、あねにはかくといふへきやうもなけれは、人すくななる人折を得てたはからむと思ひたり、紀のかみ国にくたりなとして、人すくなに女とらのとやかなる折ふし、タヤみのみらたとく「20」しきまきれに、二君が軍にひとつにたてまつりておほす、引哥、タヤみはみらたとくし月まらてかへれわかせこそそのまにも見え、さて人みぬかたにすたてまつりて、二君はかりかつしをたゞきこのしりてうちへいりぬこたらひふやう（こたぢはななう）こよひは記の守かいもつと、まはの空蟬のかたにむて暮とうち給ふとせ、源氏ゆかしくおほしめして、かうしとみすのあひたに入てかいまみ給ふ、火ちかふともして、もやのはしうにそはめる人や御心にかけたる人ならんと、まつ御めとめ給へは、こきあやのひとへかさねなめり、なにかあらんうへにきて、かしらつきはそやか「21」に、はななともねひれたるままして、物けなきかたらなれとも、よしあり心あらん人とみゆ、てつきやせやせなまをいたうひきかくしたり、いま一人はにしむきに（い）残りなくみゆ、しろうきうす物のひとへに、くれなるのはかまのこしひきゆひたるほとまてむねあらはに、すこしはうそくなどなまもてなし也、しろうくつふくとこえて、かしらつきひたいつき

- (1) ㊦ナシ
- (2) ㊦すくなからん
- (3) ㊦ナシ
- (4) ㊦ナシ
- (5) ㊦ナシ
- (6) ㊦ねひ
- (7) ㊦やややく
- (8) ㊦よ
- (9) ㊦み
- (10) ㊦なく
- (11) ㊦なく
- (12) ㊦ナシ

物あさやかに、かみのさかりは、かたのわたりなと、すへてむちけたる所なく見ゆ、暮うちほて、けちすわたり、こころとけにみえてさうとけは（い）今ひとり（い）は、まらたまへや、そこは地にこそあらめ、此わたりのこうをこそ（い）「22」なとしつめていへは、むすめは、いてこのたひはまけにけり、すみ所くいくらくと、をよひをかめて、とをほたみそよそとかそふま、いよのゆの井けたもたとくしかるましくみゆ、引哥、伊よのゆけたはいつく左八右は九つ中は十六、はすへて三十三あると云也、此手にて心得給ふへし、伊よのすけかむすめなれば縁あるにや、扱うちほてふたりひと所にふしたり、空蟬とむすめと也、のちに軒は萩といひし人なり、人しつまる程に、ともし火のかたにひやうふひうけなとして、源氏を二君几帳のうちへ道ひき申たり、やをらふるまひかし給へとも、御その音なひ「23」いとしく空蟬いとく聞つけて、かほをもたけてみれば、几帳のうちへいり給に、せんかたなくて、うへにきてふしたるこうちききはめきすて、たひとへはかりをきて、へり出ぬ、うへなるものをぬきてはひかくれたれば、うつせみと名付、もぬけの心也、源氏入給ひて、ひとりふしたるを空蟬と心得て、うへなるきめをせしやり給へは、みしおよりもいきたなし、又手あたりもものしくしければ、あやしくおほす、

- (1) ㊦本文文化
- (2) ㊦ナシ
- (3) ㊦ナシ
- (4) ㊦井
- (5) ㊦ゆ
- (6) ㊦ゆけた
- (7) ㊦ゆのゆの
- (8) ㊦ゆの
- (9) ㊦井の
- (10) ㊦ナシ
- (11) ㊦ナシ
- (12) ㊦ナシ
- (13) ㊦ナシ
- (14) ㊦ナシ
- (15) ㊦ナシ
- (16) ㊦ナシ
- (17) ㊦ナシ
- (18) ㊦ナシ
- (19) ㊦ナシ
- (20) ㊦ナシ
- (21) ㊦ナシ
- (22) ㊦めす
- (23) ㊦の
- (24) ㊦諸本に

し。このむすめはなに心もなくあまましとはおもひながら、心深き事もしらすうちとけ(22ウ) たると、なまけくしくかたらひをきて、よふかく出給ふとて、かの人のぬきたるこうちきをとりてかへり給ぬ。わが殿におはして、二君にあまましかりし心のほときを給ふ。よふかくおきたまひて、御すゝりいそぎめして、御てなうひのやうに、源氏、空蟬の身をかへてける木のもとになと人からうのなつかしき哉、かのこうちきはいとなつかしく人春にしめると、御身ちかくならして見・給へり。こ君は里に行たれば、いみしくあはめ給へる。あはれも、ひたり右にくるしけれとも、かの御たたくかみをとり出たり、さすかに取て見給ふ。なみ／＼ならぬ御心さしのほともいと(23オ) しひかたくて、この御たたくかみのかたつかに、<sup>①</sup>女、うつせみの羽にそく露の木かくれてしのひ／＼にぬる、袖哉、とり給ひしうす敷と、伊勢おのあまのしほれてや、なと思ふもた、ならず、引哥、すゝか山伊勢おの海士のすて衣しほたれたりと人々見まらん

並 夕顔

六条わたりの御しのひありきと此巻にあるは、源氏御おち春宮にてかくれ給ひしか、御やす所姫宮一人もちたてまつり給て、十九より御ひとりすみにすくし給ふと、六条のみやす所と申奉るに、源氏忍ひ(23ウ) しのひにかよひまゐり給ふと、六条わたりの御しのひ

- 25 ①ナシ
- 26 ②ナシ
- 27 ③ナシ
- 28 ④ナシ
- 29 ⑤ナシ
- 30 ⑥あはれ
- 31 ⑦ナシ
- 32 ⑧ナシ
- 33 ⑨わ
- 34 ⑩も
- 35 ⑪ナシ
- 36 ⑫前坊
- 37 ⑬ナシ
- 38 ⑭前坊也へ本文化へ

ありきと(24ウ) へり、そのつるてに、五条わたりなる御めのとの家をたつねておはしたり、これみつか母大式とて、源氏の御めのと也、たそかれ時(24エ) なるに、五条のおほちに車(24オ) をたて、むつかしけなき小家ともこのもかのもなるを見わたり給ふに、<sup>①</sup>おほしき家、つくはわのこのもかのもにかけはあれと君かみかけにますかけはなし、かたはらなる家に、ひかきと云ものあたらししくわたりして、すたれもしろくすゝしけなるに、おかしきひたいつきのすきかけあまたみえてのそく、むねくしからぬすまるのさまを、いつこかさしてとおほしなせば(24オ) 玉のうてなもおなし事也、引哥、世中はいつかさしてわかならん行とまるをそやと、さたむる、きりかけたつ物に、<sup>②</sup>青きかつらの心地よけにはひかゝれるに、しろうき花(24カ) ぎとのれひとりえみのまゆひらけたる、をちかた人に物申すとくらすゝみ給ふと、みすいしん承て、此しろうくさけるをなんタかほと申侍と申て、名は人めきてかくあやしき垣ねにのみさき侍ときこゆれば、くちおしの花のちきりや、ひとえたおりにまいれ、と仰られければ、よりておゑ、此家をタかほのやと、いへり、やり戸くちに、きなるすゝしのひとへはかまきたるわらは出きて打まねく(24カ) しろうきあふきのいたうこかしたるをすいしんにとらせて、枝もなきけなき花也、これにきてまいらせよ、といふ、<sup>③</sup>侍に、源氏は御めのとのかたにて御物かたりありて、さうぬ別ほとあり、

- 2 ①云は
- 3 ②侍に
- 4 ③大御車
- 5 ④をし
- 6 ⑤ナシ
- 7 ⑥ナシ
- 8 ⑦ナシ
- 9 ⑧ナシ
- 10 ⑨ナシ
- 11 ⑩ナシ
- 12 ⑪ナシ
- 13 ⑫ナシ
- 14 ⑬ナシ
- 15 ⑭ナシ
- 16 ⑮ナシ
- 17 ⑯ナシ
- 18 ⑰ナシ
- 19 ⑱ナシ
- 20 ⑲ナシ
- 21 ⑳ナシ
- 22 ㉑ナシ
- 23 ㉒ナシ
- 24 ㉓ナシ
- 25 ㉔ナシ
- 26 ㉕ナシ
- 27 ㉖ナシ
- 28 ㉗ナシ
- 29 ㉘ナシ
- 30 ㉙ナシ
- 31 ㉚ナシ
- 32 ㉛ナシ
- 33 ㉜ナシ
- 34 ㉝ナシ
- 35 ㉞ナシ
- 36 ㉟ナシ
- 37 ㊱ナシ
- 38 ㊲ナシ
- 39 ㊳ナシ
- 40 ㊴ナシ
- 41 ㊵ナシ
- 42 ㊶ナシ
- 43 ㊷ナシ
- 44 ㊸ナシ
- 45 ㊹ナシ
- 46 ㊺ナシ
- 47 ㊻ナシ
- 48 ㊼ナシ
- 49 ㊽ナシ
- 50 ㊾ナシ
- 51 ㊿ナシ

引手、世中にさらぬわかれのなくもかなちよもといのる人の子のため、出給ふとて、これみつにしそくめして、ありつるあふき御覽すれば、人香なつかしうもてなりしたるに、女の手にて、心あてにそれかとぞみる目露のひかりそへたる夕かほの花、とかきたり、思ひの外にゆへ有て見給ひて、きこえたるもにくからずおほさまにこそ、此かたにはをもからぬ御心なりけれ、御返は御たうのみにあらぬさまにこそ、に書かへて、源氏よりてこそそれかともみめたそかれにほのく見つる花の夕かほ、有つるみすいしんしてつかはす、そのうちこれみつに、このとなりの家あるしよとはせたまへは、やうめいの介なる物の家に侍る、おとこはるなかへまかりて、女とちみやつかへ人なときかよひ侍る、と申、此やうめいの介を、源氏三ヶの本事のそのひとつといへり、其後これみつにあんない見せ給へは、くわしく見とりて申せしと、夕かほの宿の中道のかいまみと申也、ほどなくかよひせめ給ふ、女のおさまあましままであへかにやはらかなるさましたり、とりたて、けたかくなとはあらぬ人の「さうたうらうたけにたをやかなると、あはれに見給ふ、大殿の姫君、六条のみやす所などへもかれくになりて、たうこの人に御心とまりたまふ、八月十五夜も此やとにとまり給へる、六条のみやす所の御おとに、中持の君といふ女房有、ある時源氏、みやす所の御かたより帰り給ふあしたに、らうのかたへ御をくりにこの中持参たり、

- (16) ①た
- (17) ②は
- (18) ③も
- (19) ④こそ
- (20) ⑤ナシ
- (21) ⑥ナシ
- (22) ⑦とて
- (23) ⑧供
- (24) ⑨ナシ
- (25) ⑩ナシ
- (26) ⑪ナシ
- (27) ⑫ナシ
- (28) ⑬ナシ
- (29) ⑭ナシ
- (30) ⑮ナシ
- (31) ⑯ナシ
- (32) ⑰ナシ
- (33) ⑱ナシ
- (34) ⑲ナシ
- (35) ⑳ナシ
- (36) ㉑ナシ
- (37) ㉒ナシ
- (38) ㉓ナシ
- (39) ㉔ナシ
- (40) ㉕ナシ

八月わたりなまに、しん色のも・なやかにひきゆひたらしこしつきたをやかにみゆれば、見かへり給て、すみのまのかうらんにしはしひきすへ給て、咲花にうつるてふ名はつゝめともおらて過うき「ま今朝のあさかほ、いかゝすへまとの給へは、中持、あさ霧の晴まもまたぬけしきにそ花に心をとめぬとぞ見る、とみやす所の御事に申たり、源氏心ありておほさまへし、扱八月十五夜あかつきちかくなりけるに、おきなひたるこゑにてぬかつくそきこゆる、南無たうらうしとおかむ、かな聞たまへ、此世のみとは、おもはさりけりとおはれかり給て、源氏、うはそくかをとこなふみちをしるへにてこんせもふかき契りたかふな、みろくの世までと契り給ふ、女、さきの世のちきりしらすゝ身のうさにゆくすえかおてたのみ」  
 ②ウ、かたさよ、となりの家／＼めさまして、あはれいとさむしや、ことしこそなりはひにわたのみすくなく、るなかのかよひも思ひかけねは心ほそけれ、なとかたぶもきこゆ、又こほくとなる神に似たるかうらすの音も御枕かみにきこゆ、此あかつきなにかしの院といふ所へ、此女君をいさなひて車にのりそひておはします、名さゝしとてなにかしの院といへり、六条かはら也、融の大臣の跡と云り、いみしくあれまどひて軒の忍草しけりたり、女はいと物おそろしと思ひたり、朝霧もふかければ、源氏、いにしへもかくやけ人のまとひけん我またしらすぬしのゝめのみち」(2)ウ、女君、山の物の心

- (24) ①あへ
- (25) ②な
- (26) ③ナシ
- (27) ④すみ
- (28) ⑤
- (29) ⑥
- (30) ⑦ナシ
- (31) ⑧ナシ
- (32) ⑨ナシ
- (33) ⑩ナシ
- (34) ⑪ナシ
- (35) ⑫ナシ
- (36) ⑬ナシ
- (37) ⑭ナシ
- (38) ⑮ナシ
- (39) ⑯ナシ
- (40) ⑰ナシ
- (41) ⑱ナシ
- (42) ⑲ナシ
- (43) ⑳ナシ
- (44) ㉑ナシ
- (45) ㉒ナシ
- (46) ㉓ナシ
- (47) ㉔ナシ
- (48) ㉕ナシ
- (49) ㉖ナシ
- (50) ㉗ナシ
- (51) ㉘ナシ
- (52) ㉙ナシ
- (53) ㉚ナシ
- (54) ㉛ナシ
- (55) ㉜ナシ
- (56) ㉝ナシ
- (57) ㉞ナシ
- (58) ㉟ナシ
- (59) ㊱ナシ
- (60) ㊲ナシ
- (61) ㊳ナシ
- (62) ㊴ナシ
- (63) ㊵ナシ
- (64) ㊶ナシ
- (65) ㊷ナシ
- (66) ㊸ナシ
- (67) ㊹ナシ
- (68) ㊺ナシ
- (69) ㊻ナシ
- (70) ㊼ナシ
- (71) ㊽ナシ
- (72) ㊾ナシ
- (73) ㊿ナシ

心もしらてゆく月ほうはの空にて影やたえなん かうちんに御車ひ  
 きかけておましよふほとと立給へり おり給てはよろづうちとけ  
 て このほととの・くるしかりしやとのありさま引かへて 今そ源  
 氏なりとしられ給ける 八月十六日也 源氏 夕露にひもとく花ほ  
 玉ほこのたよりに見えしえにこそ有けれ つゆのひかりやいかにと  
 の給へは しりめに見をこせて ひかりあるとみし夕顔のうは露は  
 たそかれ時のそらめなりけり かうしとくおうして 御とのあふら  
 まいらせたり なにりなくうちとけて おき中河と契り給ふより外  
 「アウ」の事なし 引舟 鳩とりの沖中河はたえぬともきみとがた  
 らふことのつきめやは よひすこし過るほどに 源氏すこしまとら  
 み給ふ夢に 御枕かみにいとおかしけなる女をていふやう どのれ  
 かいとめてたしとおもひ聞ゆまをはたつねもおほさて そころなる  
 人をておはしたる事 と申て この御そはなる人をかきおこなん  
 とす 物にあそはるゝ心ちしてみあけ給へは 御とのあふらもきえ  
 にけり むくつけくおほしめして 人をめさんとて御手をたゞくに  
 山ひこのこたふるもうるさし 此女君物にこそはれて いかさまに  
 せんと、あせもしとになかれたり 右近とてめしくしたる女」  
 を 房 これもおそろしと思ひたれば 御枕なるたちをひきぬき給  
 ひて、しそくめさんとして 御みつから西のつま戸に出給へり、あせ  
 は、御こたへしておきたり、しそくもてまいれ、すいしんもつらう

- (1) 給かへり (2) 諸本、こころ (3) 給に (4) 給給へり (5) 給
- 五 (6) 給ある (7) 給ある (8) 給有 (9) 給あり (10) 給に (11) 給に
- (12) 給は (13) 給ナシ (14) 給に (15) 給よひ (16) 給ほとと (17) 給と
- (18) 給ナシ (19) 給おそま (20) 給て (21) 給ナシ (22) 給ナシ
- (23) 給ナシ (24) 給と

ちしてたえすこはつくれ、人はなれたる所にてうちとけてさふらは  
 物かは、とて、かへり入て、かいかくり給へは、女君いきもせて、  
 なよくとわれかのけしきなり、いとかよはくて、ひるもてらとの  
 みみつるものとおほすに、せんかたなし、かろうしてしそく参た  
 るに、御夢に見えし女の面かけにふとみえてうせぬ、むかし物かた  
 りにこそかゝる事はきけとあさましけれとも、まつこの人いかに成  
 めまきとおほす、御心まとひに御身の上もしられ給はず」(25) つ  
 といたまちて、あか君や、いき出給へ、我にいみしきめみせ給  
 ひそ、との給へと、ひえはてにければ、けはひもうとく成ぬ、大う  
 ちのたきくちのとのるまうしの手も、今夜御供なれば、ゆつまつき  
 くしくならして火あやぐしといふ、夜なかにもなりぬらんとおほ  
 ゆるに、風あらしくふきて、御とのあふらはほのかにまたき  
 たり、屏風のかみこ、かしこ、くましくしきに、物のあしきひし  
 として、うしろよりくるこ、地す、南殿のおにのなにかしのおと、  
 をおひやかしかんためしをおほしいて、さりともむなしくなりは  
 てし、よるのこゑおとろくし、と右近かなくをせいし給、音貞信  
 公よに入て南殿を(26) 過給ふに、御劔の石つきをとらへたるを  
 さくり給へは、毛のある手の爪の刃のことく也、鬼とおほして、ゆ  
 るすはあしかりなんとて太刀をぬき給へは、うしろのすみへま  
 かりけるこそ、大鏡にあり、これみつめしにつかはしたれと、有か

- (27) 給は (28) 給かへり入て (29) 給み (30) 給ナシ (31) 給も
- (32) 給おほす (33) 給そころく (34) 給ナシ (35) 給ナシ (36) 給
- あさましけれとも (37) 給しられぬ (38) 給は (39) 給か
- (40) 給ナシ (41) 給して (42) 給ナシ (43) 給に (44) 給ナシ
- (45) 給ナシ (46) 給ナシ (47) 給牛の (48) 給手にて (49) 給なる
- (50) 給り (51) 給めきて

されたぬ物にて、こゝかしこたつぬまほと、夜の明る久した。干と  
 せとすくす心ちし給引哥 くるまは干とせとすくす心ちしてま  
 つはまことのひさしかりけり 松のひきも聞えて、竹しきある  
 とりのからこゑになきたるを、ふくろふはこれにやとまりあつめす  
 こくおそろしきに、なとかくはかなきやとりはとりつるさと、くや  
 しさもやらんかたなし、鳥のこゑはまかに「あや きてや かうう  
 してこれみつまいれり、めしりれて、こゝにいとあやしき事の有を  
 あさましといふにもあまりてなん、かゝるとみの事にはくわんなど  
 もたてさせんとて、あしやりを物せよといひしは、との給ふ、  
 給へり、なき給ふ御有様をあはれにうたしと見たてまつりて、こ  
 れみつをのれもよとなきぬ、あしやりは昨日山へのほり侍りき、  
 めつうかなる御事にも侍るかなとて、さても人にかゝることかくさ  
 んには、いつかたへかまかまへきと申あはせて、ひんかし山に  
 としころしれるあまのみつわくみて侍るところへ「30乙 いれ奉ら  
 ん」と申引哥、としふれは我くろかみも自河のみつわくむまてお  
 ひにけるかな、さらば源氏は御馬にて二条院へおほしませとて、此  
 人を車にのせんとてしたゝかにもえせでは、うはむしうにをしく  
 みたるに、かみはこほれいて、めもくれておほつさる、右近をく  
 るまにそへて、これみつはくろりひきあげなとして、ゆゝしきとく

- 82 守ナシ
- 83 守通
- 84 守して
- 85 守ナシ
- 86 守駕せ入
- 本文化、(87) 守参路
- (87) 守本、とり
- (88) 守す、ろ
- (89) 守す、たく
- 守す、
- (90) 守「駕せ」
- (91) 守「傍記マ」
- (92) 守ニニゆる
- (93) 守
- ナシ
- (94) 守ナシ
- (95) 守ナシ
- (96) 守ナシ
- (97) 守
- ほナシ
- (98) 守
- (99) 守

リと思ふ、  
 むわとあさ入ておほすに、やまかたなれば、なとかのりそひてい  
 かさりつらん、いき出たらんときつらしとやおおはん、と心まとひ  
 のなかにもおほはる、かくいふは十七日のあした也、そのくれに  
 ひんかし「30ウ 山へ御馬にておほしたれば、ともし火とりそむけ  
 て、たゝありしかたちなからうちふしたるに、わかればなるの御そ  
 のかさなりたるなど、いかなるむかしの契りにか、悲しくて、我に  
 いまひとたひこゑをまかせ給へと、なきこかれ給ふをまくに、念仏  
 のそうともみな涙おとす、うこんをば、いさ二条院へとの給へと  
 いと「たなきよりかた時はなれたてまつらさりし人にをくれて、い  
 つくへかまかり侍らん、たゞけふりにたくひてうせなん、と申せば、  
 世の中の別といふ物の悲しからぬはなきわさ也、思ひのひめて我を  
 たのめとの給ひて、とかくの事はこれみつたすれば、かへり見  
 からに・帰し給ふとて、つゝみのニシテ、ほどにて御馬よりすへり  
 おちて、いみしくまとひ給ふ、これみつ心まとひして清水の観音を  
 ねんし、我御心にもほとけをねんし給ひて、とかくたすけられつゝ、  
 二条のろんに帰り給ふてのち、いたくなやみ給ふ、うちにおほしめ  
 しなげ事かきりなし、しゆほうときやうまつりはらへ、と、あめ  
 のしたのさはきにて、やうくなか月あまりにぞふこたり給へる、  
 わなきかちになかめ給ひて、源氏、みし人のけふりを雲となかひれ

- 97 守
- 98 守
- 99 守
- 100 守
- 101 守
- 102 守
- 103 守
- 104 守
- 105 守
- 106 守
- 107 守
- 108 守
- 109 守
- 110 守
- 111 守
- 112 守
- 113 守
- 114 守
- 115 守
- 116 守
- 117 守
- 118 守
- 119 守
- 120 守
- 121 守
- 122 守
- 123 守
- 124 守
- 125 守
- 126 守
- 127 守
- 128 守
- 129 守
- 130 守
- 131 守
- 132 守
- 133 守
- 134 守
- 135 守
- 136 守
- 137 守
- 138 守
- 139 守
- 140 守
- 141 守
- 142 守
- 143 守
- 144 守
- 145 守
- 146 守
- 147 守
- 148 守
- 149 守
- 150 守
- 151 守
- 152 守
- 153 守
- 154 守
- 155 守
- 156 守
- 157 守
- 158 守
- 159 守
- 160 守
- 161 守
- 162 守
- 163 守
- 164 守
- 165 守
- 166 守
- 167 守
- 168 守
- 169 守
- 170 守
- 171 守
- 172 守
- 173 守
- 174 守
- 175 守
- 176 守
- 177 守
- 178 守
- 179 守
- 180 守
- 181 守
- 182 守
- 183 守
- 184 守
- 185 守
- 186 守
- 187 守
- 188 守
- 189 守
- 190 守
- 191 守
- 192 守
- 193 守
- 194 守
- 195 守
- 196 守
- 197 守
- 198 守
- 199 守
- 200 守

は夕の空もむつましき哉 右近(17)のめしよせてつほねなとちかく給ひて つねはつかひならし給ふに(18)、さてもいかなる人のむすめそとくはしくとひ給へは、三位の中將(19)「(20)」と申せし人の子なり、頭の中將にはやうより見え給ひし事なと、こまかにかたり申せば、かの雨よの品々(21)ためになてしことかたりし人よとおほしあはするに、一しほあはれさまさりて、そのおさなき人とは、いかやうにもかこつて我にえさせよ、とやくそくし給ふ、此女君のちに玉かつら也、夕かほとし十九なり、かやうになやみ給ふことを、かのうつせみきゝて又たてまつる、とはぬをもなと申とはてや程ふるにいかはかりかは思ひわつらふ、と申たり、めつらしく御手もうちわなゝかると、源氏、うつせみのせはうきものとしりにしを又ことの業にかゝるのちよ、このうつせみといよの国(22)へくしてくたるとき、給ふ、かのむすめにはむことりたり、た、一夜もぬけのとき御覽しける後は、文をたにつかはしたまはぬをおほしいて、たかやかなる萩につけて、源氏、ほのかにも軒はの萩をむすはねは露のかことをなにかけてまし、女は心うしと思ひきこゆれと御返し、伊よの女のほのめかす風につけても下萩のなかはは霜にむすほゝれつ、此手とも文に此女を軒端の萩といふ、ゆふかほの四十九日ひえの法花堂にて、これみつのあにあしやりうけたまわりてたうとくしけり、誦經にとくり給ふしやうそくの中にはかまのこしをとりよせて、源氏

(17) 諸本、と (20) ナシ (21) ナシ (22) ナシ  
 ナシ (24) ナシ (25) ナシ (26) 大などかはとはて (27) 大などかはとはて  
 とかとはて (28) ながとはて (29) 大などかはとはて (30) 大などかはとはて  
 ぶ、 (31) あはれ、 (32) ナシ (33) ナシ (34) ナシ (35) ナシ  
 (36) ナシ (37) ナシ (38) ナシ

なくくもけふは我ゆふ(39) 下ひもをいつれの世にかとけてみるへき、伊よの身国へ下るに女房もくそくするとて、源氏よりたむけことに(40)、くしあふきなとおほくつかはさる、(41) うつせみのかたへ、刃心ひて御文あり、かのとり給ひしめぬけのかうしきをいまそかへし給ふ、又旅のしやうそくそへてつかはす、源氏、あふまてのかたみばかりと見しほとそひたすらそてのくちにけるかな、御返し空蟬、せみのはもたちかへてける夏夜かへすをみてもねはなかりけり、けふは冬たつ日なりけるもさるく、うち時雨たる空に、伊よへくたると、夕かほのかなしさをもなかの給て、源氏、過にしもけふわかるゝも二道に(42)、ゆくかたしらぬ秋のくれ哉、いづれも人しれぬ御ものおもひなり

(39) ナシ (40) ナシ (41) 諸本、は (42) 諸本、こうちき、  
 (43) 諸本、に (44) 大などかはなけれ (45) ナシ

(付記)

諸本の閲覧・調査に御厚配を賜った 九州大学文学部、東北大学附屬図書館、天理図書館、島原松平文庫の各位に深謝申し上げます。

— 福岡女子大学助教授 —